

ほかの人には影も形も見えん、声も聞こえんのやと。

ある日、テングが、「今日はめずらしい所につれていてやろう。背中に乗れ。今から走り飛ぶけど、ぜったい目を開いたらあかんぞ。」という。そやけどあんまり大きい音がするんで、お父さん思わず目を開けてしもた。とたんにテングは、

「もう重とうて進めん。」というた。あたりは見えたこともない山ん中。今度はぜったい目を開けん約束をして家へつれて帰つてもろたと。

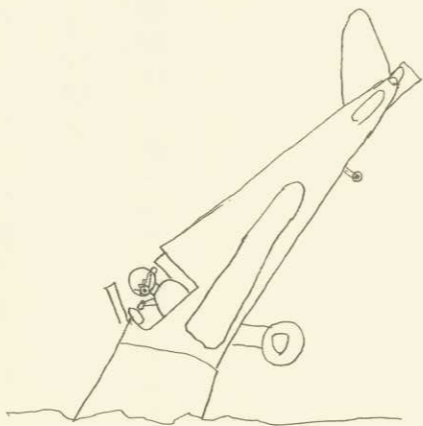
そして、十五年ほどたった明治のはじめ頃、お父さんは神社のよこに小さいお堂をたてて、鉦や笛・太鼓をたたいて、テングとお別れの会をした。

村の人が、「テングはどんなかつこうしてたんか。」と聞いても、だれにも教えなんだんやと。



### 29 飛行機が落ちた

あれは第二次世界大戦も終りに近い年の夏のお昼ごろだった。飛行機が数機飛んできた。すると、一機だけ波のようにゆれだして、金谷との境の、寺中の山北瀧谷へ落ちてきた。ドカンともものすごい音がして、ひどい土煙があがった。みんなは敵のアメリカの飛行機が落ちたと思った。若い男は戦争に行っていて村にはおらず、じいさんらが竹槍や鍬や鎌を持ってかけた。中には日本刀やなぎなたを持った人もいた。敵の兵隊をつかまえて、手柄をたてるつもりだった。



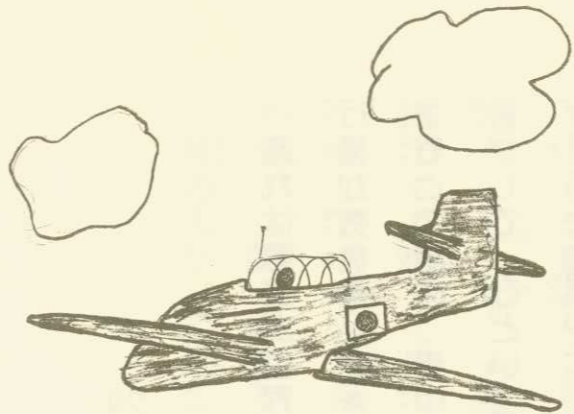
飛行機はプロペラが半分に折れて、五十メートル先にとんでいた。あとの機体は粉々にこわれていた。飛行士は落下傘で脱出して尾花の山の松の木にひっかかった。竹槍をかまえて待っていたみんなの前に、飛行靴の片方だけはいた兵隊が、腕に付けた日の丸見せながらヨロヨロとあらわれた。みんな肩の力が抜けてしまった。そして手分けしてもう片方の靴をさがしたのだった。

これは名古屋の基地から飛んできた陸軍の飛行機で、燃料が漏れて落ちたらしい。飛行士は  
椿坂の山田航空少尉と同年兵だった。

日本軍の秘密が漏れないよう、飛行機の主な残骸はトラックで持って行ってしまった。操縦席  
の風防ガラスの破片は、服にこすりつけると甘いような不思議なおいがしたので、子供たちは  
大事に持ち帰り宝物にした。

戦時中は、河和田にも飛行機が飛んできた。航空隊に入ると練習機で訓練を受ける。それが終  
つていざ実戦という前に、故郷への挨拶の飛行が許されていた。河和田  
小学校の上を、低空飛行で旋回しながら別れていった飛行機もあった。  
プロペラの圧力で国旗掲揚塔がゆれ、飛行士の顔が見えた。  
後で聞いた話だが、山田航空少尉はB29爆撃機と戦って、勝ったこ  
ともあったとか。

あれからもう六十年が過ぎてしまった。



### 30 清平さんと黒仏さま

元龜三年（一五七二年）二月中旬のこと、金谷の百姓清平さんは続けて三晩も、庭の池から光  
が輝く夢を見ました。信心深い清平さんは、お仏壇に香と花をそなえて、一心に念仏を唱えてい  
ました。

すると、庭の池の方で、

「清平、清平。」と呼ぶ声がします。急いで庭の戸をあけると、池には五色の雲がたなびい  
ていて、まるで水がわくように光が輝きわたっています。すると水の中から神々しい仏さまが現  
れて、清平さんの肩に乗られたのです。

清平さんは喜びのあまり、家の中におつれして昼も夜も供養しましたが、このような尊い仏さ  
まをこんな百姓家に置いてはもったいないと、近くのお寺にお移しました。すると清平さんは  
ある夜また夢を見ました。仏さまが、

「いっから東南の方に禅寺がある。そこに移りたい。」